



目次

美の勝利	
美の勝利 ヨーゼフ・ロート	2

美の勝利

美の勝利 ヨーゼフ・ロート

§ 1

わたしの古くからの友人、スコヴロネク博士の人間性についての見識ときたら、もうそれは相当なものだ。博士は、子宮痛や不妊症、ヒステリーに不思議な力を発揮するというある名高い婦人用温泉地で、もう二十五年以上も医師をしている。温泉の効能は博士の折り紙つきだ。しかし、何ととっても、博士が同じだけの確信をもって口にするのは、若くたくましく、愛に飢えた数知れぬ男たちが、温泉の憩いを求める各シーズンの女患者たちに与えるのが常である、驚くべき、しかしはるかに説明が付きやすい、あの効能である。彼ら、若さをもて余した男たちは、いわゆる〈シーズンの開幕〉と共に、一種の渡り鳥のように正確にこの温泉地に姿を現わすと、当地の高名な温泉とその治癒力を競いあうのだ。ともかく、わたしの友人、スコヴロネク博士は、この四半世紀の間ずっと、女性の心と体の病気について、じっくりと見識を深めるための機会をえた。考えてもみて欲しい。一シーズンに三十人の患者しか診ないとしても、二十五年後には、七百五十人を下らぬご婦人方とよしみを結んだ計算になるのだ。以上のことから、わたしがこの友人の世間知を高く買うのは、あながち根拠のない話ではないのである。

以上のような次第で、わたしは同時に（本当の病気も、思い込みだけの病気も含めて）、病気の妻に悩む全ての夫たちもまた、スコヴロネク博士に引き渡すようにしていた。ご婦人方が自分の病気に悩むより以上に妻の身を案じるのが常である夫たち、彼らもまた、博士が治療の対象とするところなのだ。——ちなみに、これにはちゃんとした理由がある。そう、わたしは、友人の博士を婦人科医としてより、むしろ既婚男性科医として買っていたのだ。——とはいえ、博士自身は、これには耳を塞いで、「わたしの名声に傷をつけようというお積もりですか。」と、言うのであったが。ともあれ、彼はそんな男であった。つまり、女患者の心とはらわたを調べ上げる一種の聴罪司祭のような物分かりのよさの裏側で、妻に心を奪われた夫たちへの思いやりの心を密かに隠していたのだ。誰でも、これだけの数の女たちを診察すれば、むしろ夫たちとの情熱的な連帯感を見い出さざるをえなくなるのである。

そんな訳で、ある日のこと、わたしは知人のひとりの技術者のMに、スコヴロネク博士の門を叩くようにとの助言を与えた。「最初はひとりで、病気の奥さんは連れずにお行きなさい。」自分の妻について、技術者は延々と話をしてくれた。若い男で、二年前に結婚したばかりで、子供はいなかった。一年にわたる幸福な結婚生活——あるいは、世間でそう呼び習わされるもの——の後で、その妻が、頭、腹、喉、鼻、目、足に、痛みを

訴え始めた。決めつけがよくないことくらい、分かっている。だが、わたしには、経験上、技術者——とりわけ、この友人がそうであった橋梁建築技師——が、女の構造には、からきしのネンネであることがよく分かっていた。例外はある。しかし、ここで取り上げたこの橋梁建築技師は、手のつけられないパニックにすでに襲われていた。妻が苦しみ、ただ泣いているのを見せさえすれば、どんな勇敢な男であろうと襲われざるをえない、あのパニックに（それは、病人を前にした健康人、あるいは失神者を前にした強者に襲いかかるパニックだ。恋人や愛する人を前にした、愛と同情と不安の混じった気もちというもののほど危険なものはない。病気のユーリアより健康なクサンティッペの方がずっとましだ。我慢をすればよいのだから）。ともかく、この技術者にはスコヴロネク博士の門を叩くようにとわたしは勧めた。

博士の初診の場には、わたしも立ち会った。——技術者のたつての希望で、わたしの意思には反して。わたしの置かれた立場はといえば、ホテルの一室の薄壁一枚を隔てた隣客のやり切れない内輪話を聞かされながら——、かといって、何をしてやれる訳でもない人間、およそ、そんな立場になぞらえることができた。何か別のことを考えようかとも努力はした。新聞を取り寄せてもみた。しかし、物書きとしての職業的な好奇心は、いつしかプライバシーにまつわる個人的な努力を全て凌駕してしまっていた。聞くともなく、いわゆる職業的な耳でもって、今、この場ではとても話せない全てのことを聞いてしまった。

スコヴロネク博士は黙して語らなかつた。ただ耳を傾けていた。「次は奥様をお連れ下さい。」と、最後に勧めて、彼は技術者を解放した。

技術者は去った。友人の沈黙の意味を理解できず、次第に技術者の妻のことが心配になってきたわたしは、こう聞いた。「彼が奥さんについて語ったこと、あれはよくない兆候ですか？ どうして黙っていたんです？」「悪くもない、まあよくもないがね。」と、博士が答えた。「よくあることに過ぎんよ。ただ、過去にあのように数奇な症例に接していなければ、ここまで寡黙ではいられなかつたらう。そして、あの症例を経験してからというもの、僕は病気の妻をもつ夫に、同情するのを止めたのだ。不治の者を治療しても始まらない。死にたいと思う者を救うことなどできない。ある種の特定の病に冒された女を妻とする夫、彼らの自殺を食い止めることなど誰にできよう。そのことを信じてもらうため、これからある一件について話をしようか。いつの日か、このネタを本にしてくれたまえ。」こうして、スコヴロネク博士は話し始めたのであった。

§ 2

「もう何年も前の話だ。その頃、僕は、ある地方都市で売れない開業医をやっていた。ある日のこと、ひとりの若い男が診察時間にやってきた。当時はまだ患者もそれほどではなく、ひとりも診察に来ないという日が何日もあった。ところで、そういう時、僕は椅子に腰を掛けて、ひたすら患者を待ちながら、犯罪小説に読み耽っていたのである。本

来なら、医学書を読むべきだったのかもしれない。しかし、残念なことに、犯罪者や警察に対する興味の方が、自然科学や高名な同業者がもたらす認識に対する尊崇の念を常に上回っていたものだから。暇をもて余した医者が、まれな患者の来訪に魅了されるというのは、君にも分かってもらえるだろう。そして、僕は手もち無沙汰な医者がよくやるように、その若者を待合室に引き留めて、数分の猶予の後、初めて入室を許可したのである（僕がその数分間を、当の若者よりはるかにもどかしい思いで待ったのは、容易に察しがつくだろう）。知っての通り、自分を統制できない状態は、危険な病気と同じで、しばしば自殺という手段を通じて、人を死にすら導くものだから。気もちもようやく落ち着きを取り戻してきた。そこに男が入ってきた。僕は、男の姿をほれほれとした気もちでうち眺めた。そして、当然のことながら、その衣装に裕福さのしるしを探すと同時に、外見に現われるあらゆる種類の病気の兆候を、その顔の中に瞬時に探し求めた。すぐにピンと来た。こいつは払いの心配の要らない患者だ。明らかに男は、よいというばかりでなく、相当に高い階級の出であることが見て取れた。――そしてまた、医療施設への引き渡しを強いる危険な病気に冒されている感じもなかった。健康な大男で、筋骨隆々としていて、魅力に溢れており、透けるような肌をしていた。ほっそりとして、均整のとれた顔形、明るい瞳の色、上品な鼻の形、美しい弓形を描いた額、たくましく長い腕。自信に満ちたと同時に、どこかほにかみ屋の、まさしくよい血統と呼ばれている全てのものがそこにはあった。家柄のよい両親、凡庸な才能、上流社会において〈洗練された〉と呼ばれる情熱をもつ、政府の役人ではないかと僕は想像した。その勘もまんざら馬鹿にできないことがやがて分かった。なぜなら、男はイギリスの大使館に派遣中の若い外交官で、よく知られた弾薬工場の経営者の息子であったのである。元々の僕の考えよりはるかに裕福な男で、その病気もまた実際〈洗練されて〉いることがやがて分かった。男は、両親の掛かりつけ医に通うのを嫌い、行き当たりばったり、僕のところにやってきた。つまり、医者住所録をパッと開いて、鉛筆で当てずっぽうに名前――それが僕の名前だった――を指差して、即座にそこを訪ねたのだ。僕は男を、陽気に、しかし、注意深くもてなした。この男のことがすっかり気に入っていた。逸話をいくつ聞かせたことか。治ってしまうと、〈残りの休暇の間、別の害のない病気に罹っていないのが残念でなりません。〉と、男は言った。全く残念この上なかった。診察しても、男は健康そのものなのだ。僕はこう聞いた。〈何か、趣味は？〉〈いいえ。音楽以外、特に。〉ご存知の通り、音楽は、僕の趣味でもある。もう分かったろう、最初、音楽は僕ら二人を絆で結んで、それから友人に変えたのだ。」

スコヴロネク博士は、そこで一息つくと、こう言った。「こうして、僕らは彼の生涯を通じてよき友人同士であり続けたのです。」

「すると、夭逝したのですか？ そんなに急に？」

「若くして、じわじわと、全ての病気のうちでも最も危険かつ平凡な病気が元で亡くなったのです。そう、彼は、女が元で亡くなりました。自分の妻が元で、彼は...。」

「彼が休暇を終えて再びロンドンに戻った後も、友情は絶えるどころか、反対に、離れたがゆえに深まっていった。ほとんど毎週、僕らは手紙をやり取りした。診察は、依然みじめな状態だった。しばしば何時間もの間、ひとりの患者を待ちながら、僕は犯罪小説を読んで時を過ごした。そんなある日のこと、彼がこんな手紙を書いて寄越した。〈二、三週間後、ゲストとしてイギリスにいらっやいませんか。〉

ロンドンに僕は出立した。英語を解さない僕は、何をすることも、友人の手を煩わさざるをえなかった。ところで、その人間が〈よい血統〉かどうかは、彼らの大なり小なりの援助にわれわれが感謝の念を抱くことができるか、ましてやそれを口に出す機会もてるかどうかで計られる。なぜなら、これら本当の紳士といわれる人間は、ほとんど全く〈ありがとう！〉と、口に出させる状況に身を置くことがないのだから。そう、彼らは、自分たちの小さな奉仕や親切はあくまで自分のためにやっているのだから、相手の無力につけ込み、自分ばかりよい思いをしているのがむしろ申し訳ないということを容易に相手に信じ込ませるのである。僕の友人もまさにこのタイプの人間であった。あれほど高潔なホストを僕は知らない。彼の繊細なふるまいは、一種の罪悪感を抱いているのではと思わせるレベルまで次第に変化していった。逆に、僕はバツの悪さを感じ始めていた。彼が最初に診察にやってきた時、愚かな職業上の虚栄心から、待合室で引き留めたのを思い出したのである。ある日、僕はこんな打ち明け話をした。〈僕は、あなたを訳もなく引き留めてしまいました。〉しかし、僕の言ったことが分からないか、あるいは理解できないかのように、彼は振る舞ったのであった。〈おそらく〉と、彼は言った。今でもまざまざと思い起こすことができる。〈お忘れになっただけで、何かご用がおありになったのです。ついでに言えば、手もち無沙汰な時、あえて人を待たせるのはよくある話です。初対面の方に会う前は、心を落ち着かせねばなりませんから。自明なことではないでしょうか。〉

それ以来、僕は、彼のいわゆる凡庸な才能というところに、思いを馳せるようになった。そして、時と共に、しばしば〈よい血統〉と呼ばれる人間に当てはまる、見かけ上の強調されたような凡庸さは、実は高潔な慎み深さの裏返しなのではという認識を、徐々に深めていったのである。とにかく、最低限の野心のもちあわせすらなかった。僕は、しばしば彼の仕事ぶりを一瞥する機会に恵まれたが、彼の最大かつ自明な努力目標が、他の同僚を出し抜かない点だけにあるのを目の当たりにさせられた。野心家の外交官とは対極にある男であった。同僚の無能ぶりを知り尽くしているにも関わらず、出過ぎた真似をせぬよう、常に注意を怠らぬのである。平民は野心に燃える。そして、本当に高貴な人間は、むしろ匿名性の裏に身を隠そうとする。生来の高貴さの中には、名声の光、輝かしい成果、勝者の権力というものより、はるかに大きな努力が隠されている。野心とは平民に特有の性質である。平民は余裕がない。彼らは、名誉、権力、威信、名声を手に入れるのが待ち切れない。ところが、高貴な人間は、待つどころか、それに背を向けるだけの余裕がある。

僕の友人もそのひとりであった。歳は一つ上だったが、一種の畏敬の念を感じるようになっていた。心酔、崇拜するようになっていたのである。

ロンドンを発つ一週間前、彼がこんな打ち明け話をしてくれた。〈意中の人がいるのです。〉

若者が恋に落ちる、そこには何の疑念もない。君もお分かりの通り、当時、まだ今日あるような〈老獺な〉婦人科医でなかったこの僕にすら、すでに何度か恋に落ちた経験があった。ところが、あの友人が恋に落ちたと聞いて、僕は非常に驚いたのであった。なぜなら、彼のような高貴な人間ですら、なすすべもなく激情に身を委ねて、自らが所有する典雅な性質で、愛していると信じる対象を飾り立てる、そういう性質があると思ひ知らされたものだから。諺でも、こう言うではないか。〈愛は全ての凡庸な人間を盲目にする。〉いわんや高貴な人間をや！

ということで、僕は、非常に驚いたのであった。僕は友人にこう言った。〈相手の方に、是非、お会いしてみたいものです。〉

〈きつと、お気に入ることでしょう。〉と、彼は答えた。――自らの愛する対象の抗しがたい魅力を信じる、恋する男の繊細さを込めて。

ああ、もうこれくらいでいい！――こうして僕ら三人は、ある晩、落ちあったのであった。

いわゆる上流階級出の若い娘であった。魅力的と言えば、確かに！ 淡青色の瞳、健康的な歯並び、少し長過ぎて冗長な顎、際立って美しい指をしたブロンドの髪乙女。もちろん、いわゆる〈礼儀作法〉はお手の物であった。彼女もまた良家の子女であり、当然、僕の友人の虜であった。――どうして、そうでない訳が？ 良家の子女にしかありえない方法で、彼女は恋に落ちていた。ひとかどの地位と名声を備えた若者との恋、それがいわゆる危険のない悪徳、呪わしい処罰につながる恐れのない火遊びでなくて何であろう？ この手の若い娘は、ガツガツと愛に飢えているのではない。ただ、ちょっとつまみ食いしがしたいだけなのだ。どうしても満たさねばならない欲望は、事情次第では呪わしい処罰を身に招く。しかし、つまみ食い程度の欲望なら、どれだけ充足させても、快樂と〈ちょっとドキドキしちゃった〉という満足をもたらすだけで、いかなる損失にもつながることはない。そこには、見世物小屋の前に立つのと、ライオンの檻の中に入るくらいの違いがある。僕の友人が、そういう一切をわきまえていた訳ではもちろんなかった。イギリスの良家の子女が心の籠ったキスをくれたという事実は、それだけで深い愛の十分な証のように、彼には感じられていた。自分にキスをするためだけに、危険な荒野の数千マイルを踏破してきたと、彼は信じていた。彼女の中に、気丈さ、大胆さ、犠牲的勇気、さらには非常な慎み深さすら、見い出していたのである。

しかし、実際には、全く思慮の足りない女であった！ そして、それは、今日もなおそうである。彼女は彼を墓穴に追いやった。彼女は年老いて後、かなり容色を衰えさせたが、しかし、愚かさという点では、今日も全く変わっていない！ 男たちが恋に落ちる時、彼らを盲目にするという意地悪さにおいて、自然の摂理には公平さが欠けている。しかし、かわりに自然は、かつて男たちを盲目にした女盛りの輝きを早々に衰えさせて、年を経るごとに垂れ下がる乳房、腹、頬、太腿を、幾らかでもましなプロポーションに整えるため、髪結い、マッサージ師、整形外科医らのいかがわしい助けを仰がざるをなくすることで、老婦人たちに対して、これらの不正の帳尻合わせをしているのである。こうして、かつての美しき乙女らは、一種の修復された石膏像として、墓穴における眠り

に就く。彼女らが元で自殺するほど子どもではない男たち、自然からのご褒美がもらえるのは彼らだけである。銀髪の威厳、それに劣らぬ慢性疾患の威厳を身にまとして、彼らは神の御許に誘われるのである。

§ 4

一般に上流階級では、稲光の直後に雷鳴が轟くように、結婚が婚約の後を追ってやってくる。僕の友人も、僕が彼の許を辞してから何日も経たぬうちに結婚して、ハネムーンに出発した。そして、その旅行の帰り道、われわれの町の側を通り掛かると、新婦と共に、この地に立ち寄ったのである。二人は、見るからに微笑ましい、互いが互いのために創造された似合いのカップルのように思われた。夕方、将校、政府高官、貴族、何人かの大地主たちが馴染みにしている酒場に、僕は二人を案内した。ところで、中小都市のいわゆる高級酒場では、人々は今日はどんな客がきているのかと全ての客にひと通り目を通すのを通例にしている。馴染みのない新顔でもあれば、それはなおさらである。それゆえ、僕の友人がその妻を連れて現われた際に引き起こされたセンセーションは、並々ならぬものだったのはもちろん、ただならぬ自然現象が何の構えもない人の心に引き起こすのが常である、そういう驚きに似たところがあった。メルヒェンのようであった。全ての会話はぴたりと止んだ。ウェイターはかいがいしい給仕の手を止めて、酒場の主人はお辞儀をするのを忘れた。うだるような夏の終わりの夕べ、窓は開け放たれ、生ぬるい風が赤いカーテンを揺らしていたが、そのカーテンすら動くのをやめたようであった。まさしく二人は神のような力を発揮したのだ。さて、咄嗟のうちに、以上のことを察した僕の友人は、最寄りの空いた仕切り席に座るようにと、妻を急き立てた。ところが、彼の妻は、この当惑に満ちた、ほとんど周章狼狽といえるほどの沈黙に、全く気づかない様子であった。彼女は、弱視であろうと正常な視力のもち主であろうと関係なく、当時、流行していた柄つき片眼鏡を愛用していたが、それをごく自然に、ほんの一瞬、一秒の何分の一かの間、鼻に掛けるとすぐまた引っ込めたのである。これを見た僕の友人が、僕と同様、ひどい当惑を覚えたのは、間違いがない。なぜなら彼は、思わず知らず、妻の腕に手をやっていたのである。――そうやって、思いやり深くやんわりと、たしなめようとしたのである。仕切り席に落ち着いてからも、まだ何度か、僕の友人の妻は、柄つき片眼鏡を鼻に掛けた。多分、広間で起きている一切のことには、何の興味もなかったのだろう。きっとそうだと、僕は睨んでいる。おそらく、眼鏡越しにシャンデリアか何かをぼんやり眺めていたのであろう。しかし、僕と友人は、眼鏡を鼻にやるというその仕草に、ひどく神経を逆撫でさせられていた。これが高慢な仕草でなくて何であらう。柄つき片眼鏡は、それだけでも十分に高慢な代物である。どれほど高貴な婦人であろうと、片眼鏡を手にしただけで、事情によっては高慢と取られる場合がある。一方で、全く独特な、ほとんど恐縮したような仕草で柄つき片眼鏡を操る、実に気品に満ちた、実際にも近視の婦人がいるのも、もちろん承知はしている。彼女らのスカートの裾をもち上げる仕草

もまた、実に味わい深い。ところで、僕の友人の妻は、確かに正しい礼儀作法には欠けていなかった！　ところが、真の気品には、全く欠けていたのであった。真の気品というものは、何をしたかではなく、何をしなかったかという中に含まれる。とりわけ、何が他人にとって〈ショック〉かを感じる能力、実際にそうなる前に、咄嗟にそれを察する能力の中に。ところが、僕の友人の妻がやったこと、それはその反対であった。彼女は、ロンドン出のうら若い中産階級の娘がするように、われわれの町の凡庸なエレガンスの程度、将校たちの不粋な振る舞い、使用人たちのせわしない給仕、婦人たちの流行遅れの帽子を嘲笑ったのである。僕の友人は、微笑み、憎めなく思うと同時に、煩悶し、恥じ入っていた。彼は、身の置き所を求めて、キョロキョロと周りを見回した。今でも覚えているが、その時、彼は、あけすけとも言える調子で、このようなことを口走りさえた。〈ねえ、グヴェンドリン、君は、ちっちゃな先の尖った舌をしているね。それ以上、お喋りが過ぎると、先生に診ていただかなくてはいけないよ！　そうでしょう、ねえ、先生？〉この冗談が全く通じなかったことを見て取った友人は、まじめな様子で、こう続けた。〈ここでの滞在は、妻の意に染まぬようです。明朝、僕らはここを発ちます。〉

彼の冗談の凡庸さに気づいたと思われなくなかった僕は、文字通りにその質問に従うようにして、こう続けた。〈さ、先生にちょっと舌を見せてご覧！〉――すぐにほっそりとした、ほとんど赤インキのような赤みを帯びた、小さな舌が顔を出した。信じてもらえると思うが、このことは僕の仕事でもあり、残念ながら僕は、それまでにすでに何千人もの女の舌を診る機会に恵まれていた。そして、その舌を一目見るなり、おそらく余りにも素朴極まりない、しかし、誠に納得させられる印象をえたのであった。〈蛇のような舌だ。〉

次の日の朝、僕の友人が僕のところにやってきた。〈今日の夕方、僕らは発ちます。〉彼は言った。〈お暇しなければなりません。〉〈美しい奥様に、最後にご挨拶しておきたかったのですが。〉〈どうぞ、夕方、駅までいらして下さい。わたしが伺ったのは、ただ二人でお別れの挨拶をしたかったからだけなのです。〉

彼が余り幸せでないことが僕には分かった。僕は彼を散歩に誘った。口を濁したくなることは、座っている時より、歩いている時の方が、むしろ口に出しやすい。面と向かっては、言い出しにくいことがあるものだ。その点、話し手も聞き手も、地面を見ているだけでよい大通りは、往々にして、アルコールや、通常、告解室が待ち構えている静まり返った教会の片隅のように、人間の胸襟を開いてくれる。かくして、われわれは散歩に出た。彼は口を開いた。ハネムーンの途中からグヴェンドリンとの間に生じた、二、三の不協和音。きっかけは音楽であった。彼女は、ワーグナーの熱愛者であった。ところが、彼はワーグナーを認めなかった。何にもまして、ワーグナーへの愛情ほど、彼――と同時に、僕――のような種類の音楽家の神経を逆立てるものはない。なるほど、ワーグナー愛好者であっても、音楽的な人間であることに変わりはない。しかし、音楽的な人間は、モーツァルト愛好者と、ワーグナー信奉者という二つの対立する集団に、おそらくは分けられる。ワーグナー愛好者という言葉を用いなかったことに気づいてもらえたであろうか？　僕は〈信奉者〉と言った。すなわち、トロンボーンとティンパニーの音色を愛する耳をもつ者たち。――そして、それに対して、チェロとヴァイオリンとフルートの調べを愛する者たち。一方でワーグナー、もう一方でモーツァルトを愛する二

人の音楽家より、二人の聾啞者の方が、まだしも意思の疎通が図られるのではないか。私見を述べさせてもらえば、本来、両方が好きということはありません。僕の考えでは、そういう人間には、本当は何も聞こえていないのだ。それでも聞こえているというのなら、指揮者である以外にはない。

さあ、これ以上言うことはない。彼らはまさにモーツァルトとワーグナーのような仲だった。この結婚生活が破局を迎えているのが、僕には分かった。しかし、僕は言った。〈お宅でモーツァルトを弾きなさい。奥さんを沢山愛して、ベッドを共にするのです。すぐに子どもを授かるでしょう。多くの場合、妊娠は音楽的な嗜好を変えてくれます。神と共にありますように。〉

僕は抱擁を交わした。まだ明日の別れを控えているというその時に。それゆえ、僕は思い至った。駅の妻の前では、僕とは決して抱擁できないのだということ。

駅に着いた。グヴェンドリンは接吻のため、僕に片手を差し出すと、可愛らしい口許に十クロイツァーの安っぽい微笑みを浮かべながら、素早く列車に乗り込んだ（不思議なことに、女というものは、本当に、貧しい街娼のような微笑み方をする。街娼が、営業で客にサヨナラの挨拶をする時のような、そんな微笑み方を）。

僕の友人はプラットホームまで降りていきたくない感じであった。しかし、同時に、ひどくオロオロしていた。あたかも妻が、上着の後ろをしっかりと掴んで放さないという感じであった。車窓から少し身を乗り出すと、もう一度、握手のために彼は片手を差し出した。――それから、僕はその場を後にした。――列車の出発には、まだかなりの時間を残していたが。

§ 5

外交官の国際的な法規や取り決めについては、僕は全くの門外漢だ。しかし、母国の代理人として職務に励んでいる当の赴任国の女性と結婚するのが一般的でないことくらい、僕にも分かっている。もちろん、例外はあろう。事実、二、三の例外なら、僕も知っている。しかし、僕の友人が、その例外に入るといってはなかった。当時、わが国の大使を務めていたのは、ほとんど厳格な形式主義者といってよい人物であった。つまり、イギリス人女性と結婚したため、僕の友人は、ロンドンを離れなければならなくなった。新しい赴任地、それは他ならぬベオグラードであった。

まだ触れていなかったが、友人の妻は、両親のひとり娘であった。ご存知の通り、イギリス人は、世界の七つの海を渡り歩くだけでなく、他のどのヨーロッパ人より各国の事情に精通しているはずの国民である。しかし、そんな両親も、暮らしにくい土地に喜んで娘を送りはしない。長期であろうと、短期であろうと、訪問旅行であれば、どんな土地でも訪れる価値はあろう。たとえどんなに暮らしにくい土地であっても。しかし、そんな彼らも、恒久的な住まいは、イギリスか、少なくとも幾らかましなイギリス植民地のどこかに定めようとするものなのだ。多分、インドへ行くと行ったのなら、義父母も

異論を唱えることはなかったであろう。しかし、セルビアという地名は、彼らに真の恐怖を吹き込んでしまった。一緒に来て欲しいと夫が懇願したにも関わらず、ベオグラードへの言いようのない不安に襲われたグヴェンドリン夫人もまた、イギリスを離れることをきっぱりと拒絶した。彼は、聖書に造詣の深い敬虔なプロテスタントの義父母から、〈どこであれ妻は夫に従うべし〉という、よく知られた一節を引き出したものの、それも徒労に終わった。こうして最初の由々しき輾轢が出来た。僕の友人はウィーンに飛んだ。そして、パリか、少なくともマドリードへの配転を画策しようと、外務省内であらゆる横車を押した。しかし、それも徒労に終わった。先着があったし、知っての通り、旧オーストリア帝国には強い後ろ盾を有する子弟が数多くいたものだから。パリ、マドリード、リスボン、すでに満席。ベオグラードで、有能な公使館参事官が必要とされているというのも、事実であると分かった。彼の地へ飛べば、才能を遺憾なく発揮できるのである。省の局長S男爵も、僕の友人の資質を正しく評価して、経歴に箔をつけることを少しは気に懸けていたのであった。つまり、八方、手は尽くされた。こうして、ベオグラード行きが決定した。

偶然にも一言いかえれば、それは必然であるとも言える。というのも、僕は偶然を全く信じないタイプの人間だから——、たまたまその年の四月から、僕もまた温泉地の医者としての最初の一步を踏み出していた。例の診療所はもう畳んでいた。というのも、その年の二月、温泉地の管理事務所が、おそらくは皆、僕のような貧しい輩ばかりからなる二十人の開業医の中から、この僕に白羽の矢を立てたものだから。この幸運を見逃す筈がなかった。直ちに世界中、もちろんロンドンの僕の友人にも、この知らせを伝えた。彼はこう書いてきた。〈素晴らしい。わたしは、多分、三月にはベオグラードに発ちます。妻は四月までロンドンに留め置き、それからあなたのところへ向かわせます。そうして、全シーズンをあなたの庇護の下で送らせてもらうことにします。八月になれば、すぐにベオグラードに出すという算段で。この知らせは、あなたにとってはもちろん、わたしにとっても幸運でした。〉

かわいそうに！ 婦人用温泉地がある種の若い女性に及ぼす作用について、彼は何の疑念ももちあわせていなかった！

後になって初めて、そのことを思い知らされることになったのである。

§ 6

以下の計画に夫人は同意した。三月、僕の友人がベオグラードへ向けて発つ。四月、夫人が僕のところにやってくる。僕の治療、そして温泉地の不思議な源泉によって、心身を鍛えられて、おそらくは、心境にも変化を与えられて、結果的に——と、僕の友人は期待した——、一切の郷愁や心痛なく、ベオグラードの夫につき従うことになる、と。

ところで、固い約束を取り交わせる女性というものが、いかにまれな存在か、それは君も、先刻、ご承知の通りだ。約束を守らないとか、故意に人を惑わせるというのではない。断じて！ 体質が固い取り決めに耐えられないのである。取り決めを守るように

定めても、意思と関わりなく、肉体が逆らってしまう。そう、あっさり病気になるのである。

さて、僕の友人の妻は、固い約束を交わせる女の側に入っていなかったのはもちろん、むしろ病気になる部類に属していた。肉体が誠実な意思に逆らう種類の女に。――実際、彼女は、僕の友人がベオグラードに向かうその前日、病気になってしまった。彼女が悪いと言う積もりはサラサラない。僕の言う意味を、きちんと理解してくれたまえ！――体質が、運命の甘受に耐えられなかったのだ。彼女がどこを悪くしたか？――神様だけがご存知だよ。イヴをお造りになったのは、神様だから。婦人科医が、女性の悪い箇所をきちんと診断できることなど、ごくごく稀な例に過ぎないのだ。

胃と、隣り合う子宮からそれは始まった。そして、ロンドンの性急な医師たちは、そのような症例における最も一般的な病名である盲腸炎という診断で、意見の一致をみた。僕の友人は二日の猶予を願い出て、それは受理された。医師たちは彼女を手術した。もちろん、盲腸は化膿していた。なぜなら、通常、摘出される盲腸のおよそ二つに一つは、必ず化膿しているものなのだ。医師たちも僕の友人も、夫人を重大な生命の危機から救い出したと信じ込んだ。愛する男の常として、愛する存在の救出を喜びながら、僕の友人は、新しい赴任地ベオグラードへと出立した。

とはいえ、依然、約束は残っていた。四月の半ばであったか。グヴェンドリン夫人が温泉地の僕のところにやってきた。もちろん、駅まで彼女を迎えに行った。彼女は、あたかも女神のようであった。盲腸をなくした女神、病気回復期にある女神。苦しみながら、同時に勝利の美酒に酔ってもいた。そして、自らを勝利へと向かわせるべく、全ての力を病気回復期から引き出そうとしていた。そう、言うまでもないが、全てのトランクが受付を済ませて詰め込まれるまでに、およそ半時間を要した。十二個のトランク、二十人の女性が、二、三年は着飾るのに不自由しない衣服と下着。僕は、グヴェンドリン夫人を帝国ホテルに泊まらせると、明日の診察時間においで下さいと告げさせた。

彼女はやってきた。僕は彼女を診察した。この診察のことは、今でもはっきりと覚えている。グヴェンドリン夫人が僕の友人の妻であったというだけでなく、初めての女性患者でもあったというそのことから。盲腸はすでに切除されてなかった。そこには、傷跡だけがあつた。ところが、夫人は〈お腹に手術の忘れ物がある。〉と、言って聞かなかった。空腹感、吐き気、動悸、痙攣、再び空腹感を、彼女は訴えた。お分かりの通り、これは妊娠の兆候である。しかし、それはありえなかった。妊娠だけは違う！　なぜなら、妊娠とは、婦人科医がそれなりの確信をもって下せる、ほとんど唯一の診断なのである。妊娠ではない！　そして、しばらく考えた後、僕はあらゆる病気の中でも最も月並みな病気に行き着いたのであった。この美しく上品な婦人は――とはいえ、あらゆる人間的な事柄は、全ての人間にとって無縁ではない――、遺憾ながら、サナダムシに冒されていたのである。

自尊心を損なわず、このことをどうやって伝えるべきだったか？――手始めに、寄生虫から話すことにした。害のないものから、徐々に危険なものについて。それから、女性美の危険な敵の一つとしてのサナダムシについて、話を進めた。説明が終わった頃には、彼女は、サナダムシを極めて興味深い相手と見なさざるをえなくなっていた。そこから、医学的な指示、食事療法、処方箋に取り掛かった。有史以来、これほどまじめに取り扱

われたサナダムシは、このサナダムシを措いて他になかった。というのも、このサナダムシは、グヴェンドリン夫人にとっての別人格を形成するまでになったのである。つまり、彼女は、自分の欲望や意思の弱さの全てをこのサナダムシの作用に転嫁した。例えば、ある朝、僕のところにやってくると、こう言うのだ。〈分かっていただけます？

この人、夜明け前にわたしを叩き起こすと、飛び切りのシャンパンを寄越せ！ と、言うんです。〉——この人——、むろん、サナダムシのことだ。あるいは、別の時には、〈家でじっとしていようと、頑張ったんです。先生がおっしゃった通りに。でも、この人が聞かないんです。吐き気を催させて。ですから、ダンスに行かねばなりません。〉などなど。彼女は、サナダムシを自分の夫より何倍も高く評価した。サナダムシは彼女の誘惑者であり、免罪符発行者であり、英雄であった。サナダムシは、彼女のようなタイプの女が必要とする全てのものを提供した。つまり、苦悩、意思の弱さ、快楽、欲望を。サナダムシは、ダンス、飲酒、食事を彼女に許可した。あらゆる禁止事項から彼女を解放した。言うなれば、全ての罪をその身に引き受けたのである。ちなみに、その一週間後には、さらに現実的な罪を。

僕が、このようなほとんど蛇のように不誠実なサナダムシを治療した、世界で唯一の医師だということを、君は認めてくれるかい？

§ 7

それからほぼ一週間後、僕の友人が、ベオグラードから手紙を寄越した。〈よもや妻の誕生日をお忘れじゃないでしょうね？〉それは、五月一日、覚えやすい日付だった。正午過ぎ、診察時間が始まる前、バカでかい薔薇の花束を抱えて、僕は、帝国ホテルの被後見人のところにやってきた。いっそ花束をダイヤモンドに預けてやろうかとも考えた。君がどうかは知らないが、とかく男というものの多くは、このような気持ちを味わうものなのだ。花束をもっている自分が、だんだん、途轍もなく無様なやつに思えてくる。ちなみに、ちょっとでも体面を重んじるのなら、花束を捧げるなどというのは、やるべきではない。しかし、この場合について言えば、このことは、僕の被後見人であり、患者であり、〈お誕生日の子供〉でもある、僕の友人の妻に関する問題であった。ということで、僕は、薔薇の花束を脇に抱えて、エレベーターに乗ろうと決心した。二階で来訪を告げさせた。制服を着たボーイが、グヴェンドリン夫人の部屋のドアをノックするのを、僕は見ていた。一度、二度、三度、応答なし。〈きっと寝ているんだろう。——それとも、入浴中かな。〉と、僕は言った。〈いいえ、違いますよ。〉と、二階担当のボーイが答えた。〈今しがた、シャンパンをおもちしたばかりです。グラス二つで。〉〈来客か。〉〈その通りです。〉と、ボーイ。〈三十二号室の先生です。〉〈誰？〉〈ブダペストからいらした青年弁護士、イエネー・ラカトス様とおっしゃる方で。〉

それで十分であった。確かに、この温泉地に来てまだ一シーズン目ではあったが、僕は、俗に言う〈新米〉などでは全くなかった。ブダペスト出の青年弁護士が婦人用温泉

地にやってくる目的、それは火を見るより明らかであった。総論、いわゆる原則としてなら、別段、このことに目撃を立てる積もりは毛頭ない。しかし、ここで問題になっていたのは、他ならぬ僕の友人の妻であって、僕は彼女のことで、彼に何がしかの責任も負っていた。そう、僕自身、すでに彼のかわりに、騙されているような気すらしていた。当時の僕は独身だったが、既婚の友人さえいれば、結婚の必要などサラサラないということを、この時、身をもって味わさせられた。つまり、全てのよき友人の妻と結婚して、その友人と共に、妻に離縁されて、その友人と共に、妻に裏切られるということなのである。――まれに、男が裏切り者である場合を除くのなら。

かくして、僕は、上品な、目もくらむばかりに白く漆喰が塗られたホテルの回廊の深紅の長絨毯の上で、言葉を失なって立ち尽くし、花束を手にも、青い燕尾服の客室ボーイを見つめていた。無様であった。――どうして、そうでない訳が?! 膝のところで美しい薔薇が萎れていくよう、薔薇の死骸を抱えているかのようにであった。僕は踵を返そうと決意した。そこで、いきなりドアが開いた。中から三十二号室のラカトスが、しかし、初めは後方から姿を現わした。つまり、僕は、彼をまず背中側から見たことになる。しかし、それで十分であった。油でテカテカと黒光りする髪を蓄えた、小さく丸い頭。まるで造物主自らが鬘をあつらえたような頭。服を着たある種の箆筒のように大きな箱型の胴体。さらに、その下のゆうに頭六つはあろうかという口に出すのを憚られるあの部分。明るいグレーのズボン。けばけばしい黄色の靴。それがラカトスであった。彼は、半開きのドアから部屋の中に投げキスを送りながら、忍び笑いをし、腰を屈めながら、最後にドアを閉めて、クルリと向きを変えた。――そこで、ボーイと僕と差し向かいになった。黒いボタンのような目、小さな鼻、コールタールのように黒い口髭だけからなる彼の顔は、あたかも蠟、赤く着色した蠟でできているようであった。そこには地肌の色はなく、一種の化粧が施されていた。悪びれる素振りは全くなかった。彼は、こちらに微笑んでみせた。それから、ズボンのポケットに手を突っ込んで、自室の三十二号室に姿を消した。

ズッシリとした重みのある薔薇の花束をあの上に投げつけたいと、どれだけ願ったことか。そうすれば、一生のうちでも最初で最後、何のために花束を掲げて行ったのか、その意味も理解できたであろうに。しかし、僕には、グヴェンドリン夫人の訪問という義務があった。お誕生日おめでとの挨拶に行かねばならなかった。

空しい徒勞の感覚に襲われて、僕はボーイに呟いた。〈こちらのご婦人の病気はひどいものでね! サナダムシに冒されているのだ。〉

〈さようでございますね、旦那様。〉と、いたずらっぽくボーイが応じた。〈たった今、そのムシが出て行かれたようでございます。〉

§ 8

スコヴロネク博士は、ここで一息置いて、時計を見上げると、コニャックを取りにや

らせながら、こう言った。「ずいぶん長く引き留めたのは分かっているよ。まあ、どうか我慢して聞いてくれたまえ。話の核心は、ここからなのだから。」

コニャックを飲むと、彼は続けた。

「ここまで話したのは、一九一〇年の出来事だった。あの時代のことは、君も覚えているだろう。バルカン半島で動乱があった年だ。そのため、ベオグラードの僕の友人の仕事も、簡単なものでは全くなくなった。手紙も途切れがちになった。年に二、三度、彼は実家に帰省した。しかし、僕が彼を見かけるのは、シーズンオフの冬、何かのきっかけで、彼がこちらにやってくる時に限られていた。——というのも、僕は、診療を開始した例の中都市に依然として居を構えて、そこに住み続けて、春になると、再び温泉地に向かうという生活を繰り返していたものだから。

僕の友人の訪問は、とても短いものだった。コンサートに行ったり、合奏したりする機会は、ほとんどなかった。だから、一緒に過ごせるまれなひと時も、会話を楽しむくらいしかなかった。ところで、これらの歳月を経た後、僕らの間には、まともな会話すら成り立たなくなっていた。僕らを友人にしたのは、音楽であった。それゆえ、音楽がないと——そのことを、その時、僕は痛感させられた——、生来繊細な僕の友人の心は、硬直してしまうのである。ぴったり並んで腰を掛けても、氷の壁で仕切られているようであった。視線は互いを避けあった。時々、その視線が掠めるように触れあうと、ほとんど肉感的といえる情感細やかな瞬間の触れあいを醸し出した。〈あなたが全てを分かってくれていたら。〉と、彼の瞳は訴えていた。瞳で僕はこう尋ねた。〈一体、何があったのです？〉しかし、やりようがなかった。音楽が欠けていたのだから。音楽だけが、僕らの友情の実り豊かな火であったのだ。僕の友人は、自らを深く恥じていた。——僕にはそれがよく分かった。ところで、羞恥心というもののほど、高貴な人間が言葉を口にしたり、会話をすることを妨げるものは他にない。高貴な人間は、ひとたび羞恥心を感じると、会話をしないどころか、大事なことを隠すようにすらなるのである。——そして、あらゆる人間的な弱さのうちでも、最も卑しむべき弱さへと墮ちることすら。——つまり、嘘つきになるのである。実際、彼が嘘をついたと思う場面が、幾度もあった。しかし、お分かりの通り、僕は、モラリストでは決してない。つまり——、人間を言葉や行動で判断する側にでなく、言葉や行動の原因から判断する側に、僕はいる。それゆえ、僕は、彼の嘘を紛れもない真実であるように受け取ったのであった。しかし、彼もまた、僕が彼と同じように嘘をついているのを感じ取っていた。それは、気まずい会話だった。

彼の面差しは様変わりした。その若さにも関わらず、鬢の毛には少し白いものが混じり、健康そのものだった小麦色の肌は、青白い、黄ばんだ肌の色に変わった。美しかった淡青色の瞳の本来の輝きの上には、灰色の嘘の帳が隙間なく幕を降ろしていた。その後、数年間、新たに彼がやってくる度、肩の幅は狭まり、ガククリと落ち込み、ますます背中丸くなり、腕の肉は削げていくのを、僕は目の当たりにさせられた。会う度、彼の妻の様子を僕は聞いた。すると、彼は語り出すのであった。当然のことながら、語り過ぎるがゆえに、多くを隠していると確信させられる、そのような語り口で。彼は、着膨れした人間、あり余る衣服やマントで裸を隠そうとする人のようであった。なぜなら、彼の言葉を信じるのなら、グヴェンドリン夫人は——彼の言う通りであってくれたらと、どんなに僕は願ったことか——、気丈で、快活で、真面目であると同時に、お転婆で、時

として、感情を逆らせる小悪魔で、時として、心優しき妖精で、主婦で、敏捷なダンサーで、男心を誘うようでありながら、実は、並はずれて貞淑で、さらに、淑女でありながら、同時に、いたいけな乙女でもある、一言でいえば、まさに外交官が必要とする伴侶に他ならないと言うのである。

〈サナダムシはどうなりました?〉と、折りを見て、僕は聞いた。帝国ホテルの客室ボーイのきつい一言を思い起こしながら。

〈妻なら健康そのものです。〉と、僕の友人は言った。

それは疑いようがなかった。彼女が健康なのは、疑うべきものがなくなった最後の最後まで、疑いようのないことなのである。

§ 9

戦争が始まった。

僕の友人（第九竜騎兵隊の予備役中尉であった）は、戦時動員のあったその日に入隊した。彼の連隊は、ロシアとの国境に配置された。グヴェンドリン夫人は、紹介状を手に、彼の両親のいるこの町にやってきた。手紙の中で、僕の友人はこう訴えていた。〈シーズン中、妻を預かってもらえませんか。〉——そうして、書いてあった通りにいえば——、〈妻を監視して欲しいのです。〉

周知のように、当時、多くの人々は、この出兵はせいぜい二、三カ月と見込んでいた。僕自身は、何年も続くことになると、うすうす感じ取っていたが。彼女の〈監視〉が不可能なのは、火を見るより明らかであった。しかし、僕は頼まれた通りのことをした。シーズン中、夫人を温泉地に引き取ったのである。

ところが、それからすぐ後のシーズンが始まって間もない頃、遺憾ながら、僕にも旧兵役経験医の入隊命令が下ってしまった。そのため、僕は、グヴェンドリン夫人を同僚の庇護の下に置いた。この男は、肉体的な欠陥が理由で——せむしだという——兵役免除になっていたのだ。

二年が経ってようやく——ちなみに、僕はチブス病棟で働き、実際、チブスにも感染した——故郷への帰還の許可が出た。そして、毎日、午前中は、制服を着た旧兵役経験医として、病気の兵士たちを診察して、午後は、病気とは呼べない女患者たちを診察することになった。彼女たちの夫は、大抵、戦地に立っていた。僕は、通常であれば、何の良心の呵責もなく、彼女たちを病気回復期の兵士たちによる、決して大人しくない治療に委ねてしまっていた。当時は、彼女たちにとっては天国のような時代であった。ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、クロアチア、スロヴェニア出のたくましい農夫たちに比べれば、かつて友人の妻の部屋から出てきたのを目撃したラカトスのようなタイプの男など、ヒョッコのようなものなのだから。ちなみに、われわれの婦人用温泉地の不思議な源泉が、戦時のあの頃ほど、驚異的な治療成績を挙げたことはなかった。あの頃の治療サロンでは、彼女たちを治療しようと、有能な戦士たちが手ぐすねを引いて待っていたのだ。

グヴェンドリン夫人はもちろんそこにいた…。彼女は、自らの母国、つまり、敵国たるイギリス、自らの出自を忘れたかのようにであった。オーストリア＝ハンガリー二重帝国の軍隊がもつ極めて変化に富んだ男らしさが、おそらく彼女の美しい胸の中にあったイギリスへの郷愁を拭い去ったのであろう。彼女は、オーストリアの愛国者に変貌していた。何を驚くことがあろう！――愛だけが、女の立場を決定するのである。

戦争が終わって、僕の友人も帰還を果たした。依然として、妻を熱愛して、そのように妻を熱愛する夫の例に漏れず、妻の貞操を頭から信じ込んで。グヴェンドリン夫人が、戦争の終結と、おそらく夫の帰還に腹を立てていたのは間違いない。しかし、戦時中に身につけた如才なさで、彼女が首っ玉に齧りつくと、当然ながら、僕の友人は、それを恋の情熱と取り違えた。

オーストリア＝ハンガリー二重帝国は、もうなかった。しかし、僕の友人が、縮小して、変質したオーストリアで自らのキャリアを継続することは、十分に可能であった（なぜなら、もともと情熱的な外交官だったのは、間違いないので）。それにも関わらず、彼は天職を放棄した。金なら十分にあった。妻の両親も十分に裕福であった。それゆえ、彼は、残りの人生をグヴェンドリン夫人に捧げることを決意したのである。

§ 10

彼らは、中立諸国を旅して回った。僕の友人の言葉を借りれば、〈古きよき平和〉を再び見い出そうと思ったのだ。だが、そんなものはどこにもなかった。彼らは故郷に戻った。彼の父親の工場は、武器や弾薬を製造する能力をもちや保有していなかった。手元にあった全ての武器は、処分するか、戦勝国側の機関に引き渡すかのどちらかであった。ある時、僕の友人の父親が病気になった。工場の倒産を前にして、みすみす手をこまねいている訳にもいかなかった。製品の転換に成功した弾薬工場の例もあった。榴弾や銃身のかわりに、自転車、機械部品、車両、車輪、自動車を生産するのである。僕の友人は、これをやってみようと決意した。もち前の器用さを発揮して、工業の多くの専門分野について、基礎からの勉強を始めた。イギリス、ドイツ、スイスの工場を見学して回った。満足できる経験を積んだと考えた彼は、再び故郷に戻ってきた。しかも、ひとりで――妻は、ロンドンの両親のところに残してきたのだ。進取の気性に溢れて、希望に胸を膨らませていた。輝かしい経歴から自分を踏み外させた運命を、ほとんど歓迎しているかのようにであった。実際、商人としての才覚や、人を見る目にも恵まれていた。そして、僕らは、しばしば落ちあい、もちろん合奏したり、コンサートに行ったりした。

ある日のこと、彼が、尋常でない時間にやってきた。僕の寝る時間が遅いのを知っていたのであった。とうに真夜中を過ぎていた。書類挿みをテーブルに置き、僕の前に立ちただかると、彼は言った。

〈本当のことを言って下さい。ご存知なんでしょう、妻は貞淑なんですか？――不貞を働いているんでしょう？ 何回？ 相手は？〉

辛い立場であった。分かってもらえるかどうか。女性の秘密を守ること、これは騎士道精神が命じる掟なのだ。そして、僕は、愛に燃える夫の怒りの矛先が、自分を騙した妻ではなく、むしろ、警鐘を鳴らし、戒めまでした友人に向かうという実例をそれまでに幾つも見てきた。女性への寛大さと友人への真実の告白のどちらの義務を優先すべきか、それは今でも分からない。ちなみに、婦人科医としての長いキャリアを積むうち、僕は、いわゆる振る舞いだけはどんどん騎士らしくなっていった。つまり、思いやり深く、女性を扱う術に長けていったのである。ところが、同時に、この弱き性を見る目は、逆に仮借のなさを強めていった。われわれが、女性に勝利するなどありえない。加えて、このことは僕の無二の友人に関わる問題でもあった。僕は、彼を見つめながら、座ったままで、ボソリと言った。

〈奥さんは、何度か逢瀬を重ねていらっしゃいました。〉

彼はドッカーリと座り込むと、書類挿みをひっくり返して、中身をテーブルにぶちまけた。軍人用のスカーフ、帽章、エーデルワイス、金属製のボタン、手鏡など。戦争中、兵士が小娘に贈るのが常である、ガラクター式がそこにはあった。

おしまいに、やはりラブレターが出てきた。小さなもの、大きなもの、飾り気のないもの、カラフルなもの。あらゆる葉書類、青色の野戦郵便。僕の友人はそこに立ち尽くすと、色とりどりの手紙の山をじっと睨んでいた。僕を穴の開くほど見つめながら、彼はこう言った。

〈どうして言ってくれなかったんです？〉

〈僕には、関係ありませんから。〉と、僕は答えた。

〈それはそうだ！〉と、突然、彼は叫んだ。〈あなたには関係がない！ あなたとの友情は、もうこれっきりにさせてもらいます。聞いていますか。あなたとのことは、金輪際、なかったことにしますから。〉

ガラクターの一切合財を書類挿みに掻き込んで、書類挿みの口を閉じると、僕には目もくれず、彼はその場を立ち去った。

〈これで友人をひとり失なった！〉と、僕は呟いた。――嘆かわしいことであった。友人をひとり失なうのは、妻を失なうのより、はるかに由々しき問題なのだ。

まだ休暇は一週間あった。しかし翌朝にはもう、僕は例の温泉地に向けて出発していた。

グヴェンドリン夫人の興奮した電報が、後を追うようにやってきた。〈折り返し、起こったありのままをお伝えいただかなければなりません。あの人は、病気にでもなったのかしら。どうして急に呼び出されるのか、全く訳が分かりません。〉

その電報を、何の添え書きもせず、僕はそのまま友人に転送した。

§ 1 1

四週間後、突如として、二人が僕のところにやってきた。事の次第はこうであった。つまり、最初に、彼が僕の部屋に飛び込んできた。何か恐ろしいことが起こったのだ。慌

てた口ぶりで、彼が説明してくれた。よくあるシーンの一つが繰り返されたのだ。最初、夫人は、何とか言い逃れしようと目論んだ。しかし、彼はいわゆる〈動かぬ証拠〉に言及して、これを彼女に突きつけた。むろん、夫人は、涙にむせびながら、永遠にロンドンに帰るつもりであるとの決意を表明した。彼女はトランクの荷造りを始めて、乗車券を買いに行った。そして、列車の発車の一時間前、彼の工場に顔を出したのであった。あの有名な〈最後のお別れ〉だ。言わずもがなであるが、彼女は手に花束を抱えていた。君はそう思わないか、人生とは、出来のよくない小説、あるいは、これから見るように、医学教本の何と惨めなコピーであることか。それから、彼女は奇妙な振る舞いに討って出た。つまり、両膝を突いて、友人の靴の先にキスをし始めたのである。その振る舞いを彼は制することができなかった。彼女は彼の頬を打った。それから、マネキンのように全身を硬直させて、床にバツタリと昏倒した。誰も彼女を立たせられなかった。なぜなら、半田づけされたようにピタリと絨毯に貼りついて、離れなかったのである。さらに痙攣が彼女を襲った。皆は、彼女を自宅に運ぶと、医者たちを集めて、ウィーンの第一人者の許に彼女を運んだ。それでも、容体は変わらず、悪いままであった。そして、病気の間、症状は極めて頻繁に変化した。ある時は、腕が麻痺し、ある時は、足が麻痺し、ある時は、頭が麻痺し、ある時は、脛が麻痺した。一口も食べられない日が何日も続いた。一目見るだけで、すぐに吐くのである。彼女を担架に載せて教会に運ぶ日が、何日もあった。お祈りしたいと彼女が言い出すものだから。彼女は夫に腹を立てていた。彼女によれば、夫こそが苦しみの張本人なのである。

かわいそうな僕の友人は、自分に非があると心底思い込んでいた。〈わたしが彼女を駄目にしました。〉と、彼は言った。〈わたしの罪です！　彼女がした何もかも、あれはわたしの罪でした！　わたしは唾で、矇でした。若い女性をひとりきりにするだなんて。彼女はどうすればよかったのですか？　夜も昼も、わたしなしで。彼女を問いつめるだなんて、何と残酷だったのでしょうか！　ちなみに、今回のことで傷つけられたとは、これっぽっちも思っていません！　ただ惨めなプライドだけが、屈辱を感じたのです。愚かな男の自尊心が。もうどんな医者も彼女を救えません。あなたでなくては！　わたしの全てをお許し下さい！〉

〈僕にも、彼女を救うことはできません！〉と、僕は言った。〈彼女を救えるのは、彼女だけです。それも、彼女がそれを望むとしての話ですが。そして、現実の彼女は病気で。それは、治癒の意思がないからです。医学では、病気への逃避と呼んでいます。これら病理学的な諸症状の典型例がここにはあります。処方箋はただ一つ。あなたが奥さんから離れることです。奥さんをどこかよいサナトリウムにお入れになるのがよろしいでしょう。〉

〈そんな無茶な！〉と、彼は叫んだ。〈二度と彼女の側から離れませんよ。〉

〈まあ、いいでしょう！〉と、僕は言った。〈お好きなように。では、奥さんのところに参りましょうか。〉

彼女は、僕のことは、にこやかな微笑みで、しかし、夫のことは、厳しい眼差しで出迎えた。それは、どんな名女優にもなしえぬ芸当であった。なぜなら、右目は僕に向かって喜びで輝いていたのに、左目は僕の友人に向かってイライラした火花を散らしていたのであったから。昨日は両方の脛が痙攣していた。そして、今日は、左手しか差し出せ

なかった。というのも、右手は硬直していたのである。〈足はどうです？〉——〈ええ、足なら、今日は大丈夫。〉——〈では、起立っ！〉軍医の頃、兵士たちに命じた口調の通りに、僕は命じた。彼女が直立した。〈ピアノのところまで、直進っ！ われわれはこれからピアノを弾くっ！〉ピアノに向かって彼女が歩き出した。着席。そうして、僕は友人に、聴くに堪えない、ある作品を手渡したのであった。考えてもみてくれ。この僕が弾いたのだ。——信じてもらえるかどうか。僕が何を弾いたのか？——ワーグナーだよ！——ワーグナーの何を？——巡礼の合唱を。——すると、彼女の右手がおもむろに動き始めた。——〈ワーグナーこそ、偉大なる巨匠ですわ！〉弾き終わると、そう彼女が言った。〈その通りですよ、奥様！ 病気のご婦人方の治療法として、ワーグナーに勝るものは、他にありません。〉僕はそう答えた。

〈あなたほどの医者はこの世にいません！〉と、僕の友人が、歓喜の叫び声をあげていた。分かってもらえるだろうか。これっぽっちも彼は気づいていなかった。この僕が、生まれて初めてワーグナーを弾いたという、そのことにね！

これほどのことを、彼女はなし遂げたのであった！ そして、さらにそれ以上のことも。なぜなら、それ以来、彼女は、僕には日に数回の休憩、僕の友人にはただの一回の休憩すら、許さないようになったのだから。夜も昼も、僕らは彼女の側に座り続けていた。より正確に言えば、周りを取り囲んでいた。そして、女患者たちの診察のために僕がひとりでいるのを許された短い時間、僕の友人には心の安らぐ時がなかった。彼がどれほど熱烈に僕を待っているのかを、僕は感じていた。僕がやってくると、僕を抱擁し、できるだけ長い間、一緒に控え室に留まろうとするのであった。二時間でも、一晩でも、二人でいるのを彼がどれほど熱望しているのかを、ひしひしと僕は感じていた。僕は心臓の鼓動を感じていた。あわれな不安におののく心臓、女主人が折檻しようと待ち構えている奴隷の心臓を。こうして、僕らは部屋に入った。すると、決まって彼女はこう聞いた。〈こんなに長い間、外で何をしていたらっしゃったの？ 外は暖かいんでしょうね！

だって、先生はマントを着ていらっしやらないもの！ あなたたち、わたしに隠しごとをしているんでしょう？ ああ、神様！ 騙されるのは、いつもわたしばかり！〉

その日のうちに彼女は復讐に出た。左足が硬直して、冷たくなってしまったのである。一時間掛かりで、僕はマッサージしなければならなかった。

頭の方に立って、僕の友人は髪を擦っていた。僕らは、一言も口をきかなかった。

さて、左足がようやく温かさを取り戻した頃、僕は友人にこう聞いた。〈ところで、あなたの工場はどうになりました？〉

〈工場？——どの工場ですって？〉と、女患者が金切り声をあげた。

〈まあ、落ち着いて。〉と、夫が言った。〈先生はわたしの工場のことをおっしゃっているのだ。あれはどうに売り払いましたよ。わたしたちは利子で暮らしているのです。〉

毎日がこんなシーンの繰り返しであった。時折、僕らは三人連れだって外出した。夫人を連れて、いや彼女を真ん中にして、引き擦りながら、僕らは歩いた。二人の腕に引っ掛かった彼女は、甘きお荷物と呼ぶにふさわしかった。僕らは、会食して、酒を飲んで、一言も口をきかなかった。

覚えているが、ある時、僕らはダンスホールに行った。ご存知の通り、僕は、情熱的なダンサーなどでは全くない。あらゆる種類の自己顕示的な——まあ、はっきり言えば

——戦後のダンスというものを、僕は憎んでさえいる。しかし、僕はすでに友人のために、彼の妻とワーグナーを連弾するまでになっていた。それゆえ、僕はダンスをした。そもそも、婦人科医がせずに済むことなど何がある？ そう、われわれはダンスをした。シミーを踊っていた時のこと、彼女がこう囁いてきた。〈愛してますわ。先生、あなただけを。〉——むろん、何も答えなかった。僕はテーブルに戻ると、友人に言った。〈奥様が、僕に愛を告白なさいましたよ。僕は、彼女が愛するただひとりの医者というところでしょうか。〉

その年のシーズンもすでに終わりに近かった。それから数日後、僕は友人にこう勧めた。〈奥様を連れて、イギリスの義理のご両親のところに行きなさい。そうして——事情が許せば——、来年もまた、こちらでお会いしましょう。〉

〈来年は、元気になって戻ってきます。〉と、彼は言った。そして、ロンドンに向けて出発した。

§ 1 2

翌年も、彼らは再びやってきた。しかし、健康とはとても呼べない状態で。僕は、〈彼らは〉と、複数形で言った。なぜなら、僕の友人も妻と同じ病気になっていたのである。あのチブスですら、ヒステリーと比べれば、感染力の点でははるかに劣る。このことは、しっかり頭に入れておく方がよい。狂気は、周りの正常人を肉体的に脅かすために危険なのではない。むしろ、周りの正常人の理性を次第に蝕むがゆえに危険なのである。この世の狂気は、健康な人間の理性よりはるかに強固である。悪は善よりはるかに強大なのだ。

その冬の間は、友人の消息をほとんど聞かなかった。おそらく、僕の助言が的を外れていたのである。なぜなら、夫人の性質の悪さは、両親の家でさらに磨きを掛けていたのだから。そこは彼女の武器鍛錬工場であった。医者、催眠術師、祈祷師、磁気療法師、牧師、老婆が、彼女の許にやってきた。そして、誰も彼女を救えなかった。ある日、彼女がこう言った。〈全然、両足が動かないわ。〉いかにも彼女らしく、それは、彼女の夫が——おまけに義父も一緒に——、彼女の発病後、初めて、何かのパーティーに出掛けた晩のすぐ後のことであった。両足がカチカチに硬直していた。松葉杖、木製義足、人工装身具の方が、まだ動くという感じであった。自分では動かせず、他人にも動かせない両足は、みるまに肉がそげ落ちて、一方の上半身は、みるみるふくよかさを増していった。もう、車椅子に載せて運ぶしかなかった。さらに、彼女が身近に見知らぬ人間が近寄るのを嫌うので、当然ながら、夫である僕の友人が、車椅子で彼女を運ぶ役を引き受けることになった。僕らが再会した時のこと、彼はめっきりと老け込み、髪は銀色に変わっていた。そして、事態はさらに深刻さの度を深めていた。なぜなら、あれほど高貴な人間が、下僕、はっきり言って、奴隷の物腰と振る舞いを身につけていたのである。妻に呼ばれる度、曹長に呼ばれた初年兵のように、彼はピリピリと身体を強張らせた。彼

女の声はしゃわがれたと同時に甲高いものになっていた。キイキイいう鋸のように、その声は周囲の空気を切り裂いた。あの頃の彼女は、キラキラと輝く、にこやかで快活そうな瞳と、愛想のよい微笑みと、ますますふくよかさを増す薔薇色の頬と、さらに肉づきを増す、えくぼの一つある顎をもった、みじめで、棒のようにガリガリの、硬直して、ピクリとも動かない足をした、翼のない、足萎えのクリスマスの天使といったところであった。そして、すでに言った通り、僕の友人は、まるで召使のような振る舞いを身につけていた。領主お抱えの老御者でも、彼の横に立てば、王侯貴族のように見えたであろう。傾いた肩、ガククリと折れた脚を引きずりながら、こそこそと彼は忍び歩いていた。こうなったのも、彼が甘きお荷物を抱えて、生涯を掛けて、永遠に荷車を押さねばならない、そのことに原因があったのであろう。おそらく、そうに違いない。そう、まるで打ちのめされたよう——まさにピッタリの表現だ——、打ちのめされたようであった！ 多分、時には本当に手を上げていたのに違いない。

僕は、彼にこう聞いた。〈愛の方はどうなっています？〉僕は、肉体的な愛のことを尋ねたのだ。ところが、考えてもみて欲しい。この夫は、夜な夜な妻の衣服を脱がせると、両腕で抱き上げて、ベッドの上まで運び、当然のことながら、彼女と枕を共にしていた。かわいそうに、彼は、愛するのを止めるとすぐ、彼女に再び裏切られるというのを、いまだに恐れていた。いや、彼女の美しさに酔い痴れてすらいた。この僕にすら、いかに彼女が美しいかを滔々と語って止まないのだ。当の彼女のブクブクに太った上半身と、ガリガリに痩せた両足を、僕が知っていたにも関わらず！

彼を最も悩ませたもの、それは彼女の嫉妬であった。一瞬でもひとりになるのを嫌いながら、彼女は看護婦を全く近寄せなかった。——夫が、看護婦に目移りするのを恐れたのである。彼女は、僕にも嫉妬していた。それどころか、客室メイド、客室ボーイ、ホテルのドアマン、エレベーターボーイにも。僕、コンサート、カフェ、レストランに、彼女を引いていった。あたかも、彼女のギシギシいう惨めな荷車の取っ手に縛りつけられて、蒸し返すような夕方の、往々にして雨と風の中を、ハアハアと息を喘がせながら、相も変わらず、流行の先端を走る彼女の帽子に傘を差して、硬直した膝の上に掛けた膝掛けの皺を絶えず伸ばしてやっている、荷車引きのロバといったところであった。ホテルでは、婦人帽のデザイナー、縫い子、裁断師といった連中が、灯火に群がる蛾のように、ヒラヒラと飛び回っていた。ショーウィンドウでは、三軒おきに足を止めなければならなかった。なぜなら、好みにピッタリの一物を探し求めて、あらゆる宝石商の軒先に荷車を転がさせるものだから。午前中は必ず髪結いがやってきた。僕の友人は、毎朝、彼女を風呂に入れてやっていた。そして、彼女が湯船の中でゴムの動物と戯れている間、社交界を舞台にした愚にもつかぬ英語の小説や雑誌の一節を、読み聞かせなければならなかった。

治療は、もう何の効果も現わさなかった。医者言葉で言えば、夫人の中には〈健康への意思〉が見い出せなかった。すでに精神の病が彼女の中にしっかりと根を張っていた。もうどうにもならなかった。

友人と二人になることには、どうしても成功しなかった。彼女が、僕らに十五分をすら許さなかった。しかし、あれこれと逃げ道を画策して、僕はついにそれを発見したと信じるに至った。嫉妬から、彼女は看護婦を遠ざけていた。——では、男だったらどうなのか？ 僕は、病院にひとりの有能な若い青年がいるのを知っていた。僕は、彼

に話をし、彼はそれを快諾した。グヴェンドリン夫人のところに彼を派遣すると、彼はすっかり彼女のお気に召した。〈あら、でも、すぐになって訳じゃないのよ。〉と、彼女は言った。〈ロンドンに帰る時、一緒に連れて行きましょう。ただし、ここではあなた方を二人にしませんから。〉結局、何も変わらなかった。そして、シーズン閉幕と共に、彼らは若き世話人を連れて、ロンドンへの帰途に就いたのであった。

しかし、まんざらでもない達成感が、ひょっとして、あの世話人が僕のあわれな友人にロンドンでのひとときの休息を与えてくれるのではという達成感が、僕にはあった。

しかし、事実は逆であった！ 二か月もせぬうち、僕は友人から次のような短い手紙を受け取った。

〈あなたはいつも正しかった。〉と、彼は書いていた。〈今にして思えば、そのことがよく分かります。しかし、まだ手遅れというわけではありません。妻とはすぐに別れます。彼女がああ若い世話人と親密な抱擁を交している現場に出くわしたものですから。詳細は追って連絡します。〉

それから二年が過ぎた。僕は手紙を書いたが、なしの礫であった。僕の友人は、消息を絶ってしまったのだ。

§ 13

ある日、パリに向かう用事があって、興味があってというより、むしろ暇をもて余して、モンマルトルに多くある夜の酒場の一軒に足を踏み入れた。酒場の門の前では、偽物のコサック兵が警護に当たり、本物のアメリカ人を中に引き入れようと手ぐすねを引いていた。自分の愚かさ加減にげんなりして、ほとんど気に病んだような感じになって、僕はそこに座り込むと、ダンスを踊るとりどりのペアに目をやっていた。不意にグヴェンドリン夫人の姿が目に入った。〈あれは彼女だ、間違いない！〉滑らかに櫛削られて、油でテカテカに光った黒髪を蓄えたジゴロの腕の中で、彼女はいわゆるジャヴァを踊っていた。男はラカトスに他ならなかった。それは、プタベストのラカトスが、一つのタイプに過ぎず、人格では決してないという意味でのラカトスであった。男が、必ずしも三十二号室のラカトスである必要は全くない。突然、彼女の視線が僕の上に落ちた。踊りの相手をそこに残したまま、彼女は、僕のテーブルに向かって歩いてきた。健康で、快活そのものの、微笑みの絶えない女神というところであった。思わず知らず、僕は腰を屈めて、彼女の足に目をやった。明るいグレーの絹のストッキングに包まれた、ムチムチとして、非の打ちどころのない足がそこにはあった。

〈驚いていらっしゃる、ね、そうでしょう、先生？〉と、彼女が言った。〈ちょっと失礼させていただきますわ。〉

彼女が腰を下ろした。

〈ご主人はどこです？〉と、僕は聞いた。〈どうして手紙をくれないのでしょうか？〉

きらりと輝く二つの大粒の涙、二粒の悲しみの衛兵が、号令を受けたように、まなじ

りの辺りに姿を現わした。

〈亡くなりましたの！〉と、彼女は言った。〈残念なことですわ。自死を選んでしまいました。それも、ほんの些細な理由から。〉

彼女は、ハンドバッグの中からハンカチを取り出した。と、同時に、鏡も。

〈いつのことです？〉と、僕は聞いた。

〈あれは、二年前のことです！〉

〈で、あなたが健康を取り戻したのは？〉

〈もう一年半になりますかしら！〉

〈お連れの方、あの方は、新しいご主人ですか？〉

〈婚約者ですの。ラカトスさんとおっしゃる、ハンガリー人のとっても素敵なダンサー。あなたももうご覧になったと思いますけど。〉

ああ、あのサナダムシ！ 考えるやいなやこう叫んでいた。〈お勘定！〉そして、手早く支払いを済ませると、座りっぱなしの夫人をそこに残したまま、さよならも言わずに、その場を後にした。

沢山の、実に沢山の女たちが、僕の脇を通り過ぎた。そのうちの多くは、僕を見ながら笑っていた。

〈笑うがいい。〉と、僕は思った。〈微笑み、ターンをして、身をくねらせて、帽子を被り、ストッキングをして、小物を買って漁るがいい！ すぐに老いが忍び寄るぞ！ あと一年か、それとも二年か！ どんな外科医や、鬘屋にだって、お前たちを救うことなどできやしない。プロポーションを崩して、憂いに沈み、ひねくれたすね者になって、すぐにも墓穴へ、そして、さらに深く、地獄の底の彼方まで、すっかり沈んでしまうがいい。笑うがいい。笑うがいい！...〉

美の勝利 ヨーゼフ・ロート

著 bambus

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
